社会ニーズに応え続ける薬学教育

広告特集
企画・制作
朝日新聞社メディアビジネス局

豊かな知識と対人スキルを持つ薬剤師を養成

薬剤師の役割は調剤・服薬指導・薬歴管理にとどまりません。他の医療従事者との連携、来局者・地域住民に対する知識啓蒙など活躍の場は多岐にわたります。医療・医薬の進歩と社会の変化のスピードが増す中で、未来の薬剤師を育む薬学教育はどうあるべきなのでしょうか。日本薬剤師会常務理事の長津雅則さんにうかがいました。

公益社団法人日本薬剤師会
常務理事
長津 雅則さん

ながつ　まさのり：1968年生まれ。94年明治薬科大学大学院修了。同年4月テルモ株式会社に勤務。98年5月有限会社ベルサポートコーポレーション　シーガル調剤薬局を開局。2019年公益社団法人神奈川県薬剤師会　専務理事、20年公益社団法人日本薬剤師会 常務理事。一般社団法人薬学教育評価機構、公益財団法人日本訪問看護財団などの各委員に携わる。20年から文部科学省　薬学実務実習に関する連絡会議委員、21年から厚生科学審議会臨時委員（健康日本21（第二次）推進専門委員会委員）。

いかなるときも人に尽くすのが薬剤師の使命

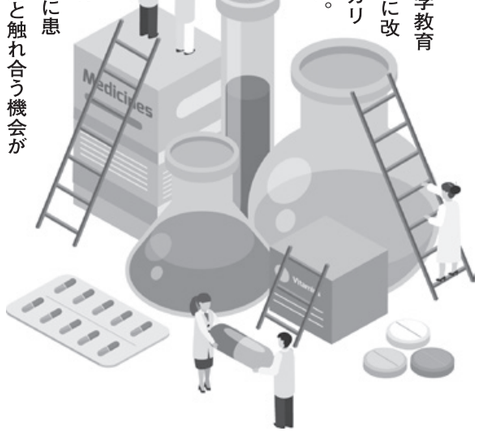
少子高齢、人口減少、未知の感染症との戦いなど、日本は深刻な問題に直面しています。今までのような国民皆保険を維持できるかどうか、難しい状況です。また、地域特性等による医療サービスへのアクセス不均衡も大きな社会課題の一つです。

医療は日々進歩しています。新しい医療技術や新薬が開発され、治療効果も上がってきています。喜ばしいことですが、その一方で社会保障費の増大という問題につながっています。

医療の質の確保と社会保障財政は表裏一体です。そのバランスを配慮した国の施策が求められますが、私たち薬剤師も現状を踏まえ、医療費の高騰を抑えるために後発品使用促進など、医療費の適正化を常に考えながら業務にあたっているところです。

また、保険医療における医薬分業の歴史は、近代医療がわが国に入ってきてから、まだ数十年しか経っていません。その短い時間の中で医療と医薬、そして薬剤師を取り巻く環境は大きく変化しています。将来の医療を取り巻く環境がどのように変化しているかは見通せませんが、いつ、いかなる状況においても、人のために尽くし、医療に貢献するという薬剤師の使命は変わりません。使命遂行には相当の覚悟を伴います。これから薬剤師を目指す人たちには、6年間の薬学教育の中でぜひこの覚悟を培っていただきたいと思います。

大切な人を守り幸せにする薬学の力



薬剤師養成のための薬学教育は2006年から6年制に改編され、15年に新コア・カリキュラムが導入されました。旧4年制課程の薬学教育と大きく異なるのは、5年次の病院・薬局という現場を意識した実務実習です。

私は旧4年制課程の教育を受けましたが、学生時代に患者さん、地域住民の皆さんと触れ合う機会が少ない状態で薬剤師になりました。そのような状態で現場で仕事を始めたときに、本当に自分にこの仕事が務まるのかと不安を感じたこともありました。そういう意味では、実務実習は非常に意義のあるカリキュラムです。将来自分が薬剤師としてどういうキャリアを築いていくのか、いろいろと考えるよい時間になることでしょう。

また、ワークライフバランスやダイバーシティ&インクルージョンが重視される昨今ですが、薬剤師は女性がキャリアを継続しやすい職業です。むしろ妊娠、出産、子育ての経験があることで、妊娠中あるいは小さなお子さんを持つ方の気持ちに寄り添って情報提供ができるため、現場では心強い戦力と言えます。

薬剤師は毎日が学びの職業です。いわば患者さん、地域住民の皆さんが教科書でもあり、多くの方と接する中で知識を増やしていくことになります。ですので、大学時代には科学と薬学の基礎と、対人コミュニケーション能力をしっかり身につけていただきたい。それができていれば、薬剤師になってからの伸び代は大きいと思います。

薬学教育の魅力は、自然科学を幅広く学べることであり、このことが滋味に富む人間形成につながっていくと考えています。薬剤師はいつまでも社会から必要とされる職業ですし、薬学という専門領域をマスターした人の知識の幅、発想力、柔軟性といったものは、様々な場面で生きてきます。何よりも、薬学の知識は自分の大切な人の健康を守り、幸せにする力になります。多くの方に大学薬学部を目指していただき、この興味深い学問を楽しんでいただきたいと思います。